SEITOKU

聖徳大学言語文化研究所主催研究発表会

英語の単語の意味と日本語訳における誤解

－接尾辞 “-able”の意味と用法並びに「アルハラ」等を例にして－

日 時 平成30年7月7日(土) 13：30～15：00

会場 聖徳大学生涯学習社会貢献センター(聖徳大学10号館) 5階051教室

住所 千葉県松戸市松戸1169
JR常磐線・新京成線「松戸駅」下車、東口徒歩1分

定員 40名（事前申込不要）

協力 聖徳大学文学部

講師 聖徳大学文学部教授
竝木崇康（なみき たかやす）

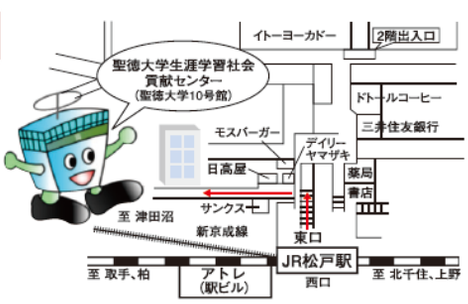
略歴 東京教育大学(現筑波大学)文学研究科博士課程
英語学専攻中退、茨城大学名誉教授、
現在聖徳大学文学部教授
日本英語学会評議員（2016年まで）、
大塚英文学会会員他

著書
『語形成』（大修館書店）
『単語の構造の秘密』（開拓社）他

最近は SDGs （sustainable development goals: 持続可能な開発目標）という表現の中で多く目にするsustainable あるいは sustainability という英語の単語は、日本ではだいぶ前から「持続可能（な）」あるいは「持続可能性」と訳されることが多い。しかし、英語の接尾辞 -able の意味を厳密に分析すると、これらは適切な表現とは言えない。

本発表においては、生産的な接尾辞である -ableが付加された単語を詳しく分析したうえで、この接尾辞が持つ複数の下位意味 (submeanings) を検討し、sustainable は「維持可能な」と訳すべきであり、sustainability は「維持可能性」と訳すべきであるということを主張する。また -ableという接尾辞が実は2種類あると考える根拠や、 -ability という語尾を含むさまざまな表現の興味深い点についても述べる。さらに英語の -ableが付加された表現に対応することが多い、日本語の「～可能な」という表現との比較を行い、なぜ日本では英語の-able で終わる単語の意味を誤解しやすいのかを明らかにする。加えて「セクハラ」や「アルハラ」、「マタハラ」等の、省略を受けた日本語表現の例についても述べる。

お問い合わせ

聖徳大学言語文化研究所（知財戦略課）
〒271-8555　千葉県松戸市岩瀬 550
電話：047-365-1111（大代表）
http://www.seitoku.ac.jp/chizai/event/

会場アクセス